会組織である東京学芸大学地理学会の底力といえる。2021年には，最終巻の5巻が出版予定なので期待したい。是非，多くの先生方に読んで頂き，本書をはじめ本シリーズを活用した授業が実践され，色々と評価されることを願う。

（深瀬浩三）

千葉県高等学校教育研究会地理部会編『新しい地理の授業　高校「地理」新時代に向けた提案』二宮書店，2019年11月刊，222p.，2,500円（税別）

2020年度から始まる「地理総合」(2単位）は「地図や地理情報システムで捉える現代世界」，「国際理解と国際協力」，「持続可能な地域づくりと私たち」の3部から構成される。高校地理が必修化されることは大変喜ばしい事と思われるが，地理ではなく歴史や公民を専門とする先生方や，教育経験の少ない若い地理の先生方の中には，「地理総合」をどのように教えるか不安を感じる教員も多いのではないだろうか。本書は，このような不安に応えるため，経験豊かな教員が「地理総合」の構成に従って，これまでの蓄積をあてはめ，授業実践をもとに指導方法や授業展開を執筆したものである。

本書は3章から構成されており，具体的な内容は以下のとおりである。まず，第1章「地図や地理情報システムで捉える現代世界」の「1．地図は身近な存在」では様々な地図が使われており，ミニ巡検の企画，簡易な地球儀の製作など，これまで続けられてきた地図学習のノウハウが紹介されている。「2．紙上でGIS，空間分析の初歩」では，バッファ生成とボロノイ分割といったGISの手法を紙地図での作業で理解させようとしている。「3．GISを活用した授業実践」では，GISフリーソフトを用いて，様々な投影法での世界地図描画や，気温や降水量の地図化などが説明されている。「4.「地理総合」に向けての交通の授業」では交通の発達と社会変容をテーマとして，モノレールのルート計画などを事例とした授業が紹介されており，空間的視点を重視して地域問題に取り組ませようとする工夫が興味深い。「コラム1 オリジナル問題がつくれない」では，オリジナルの問題を自作しようとしても，地図の加工や数値データ表の作成技術に乏しいことによる苦労が語られている。

第2章「国際理解と国際協力」の第1節「生活文化の多様性と国際理解」における「1．大気大循環は難しくない」では，大気大循環や恒常風などの自然地理の知識をストーリー立てて解説し，それと歴史的視点と組み合わせる説明が紹介されている。「2．気候学習から規則性を発見させる」では，ケッペンの気候区分から空間的規則性を発見させる試みが紹介され，単なる地域区分に陥らないための工夫も述べられている。「3．日常生活中で無意識にかかわっている産業の恩恵と副作用」では，市外局番や郵便番号と物流との歴史的な結びつき，宇宙基地の立地条件など，産業の授業を身近なものにする工夫が紹介されている。「4．多国籍企業について調べ，発表を取り入れたアクティブ・ラーニング」では，グローバル化に関する生徒の発表と，それに対する教師側の講評，発表を聞いた生徒の感想が記載されており，これを基に様々な授業のアイディアを練ることができる。「5.「アルプスの少女ハイジ」から学ぶアルプスの自然と人々の生活」は，有名なアニメーションを地理的視点で解説し，地理の面白さを伝えようとする授業実践報告である。生徒達の感想を見ると，最初に作品をいかに魅力的に伝えるかが重要な鍵となりそうな気がする。「6．生活・文化の多様性と国際理解　世界の言語・宗教」では，日常会話や年中行事を事例として国際理解

の大切さを学ぶ授業が紹介されている。「コラム2　エシカルな消費者を育てる」および「コラム3　地理的な視点で歴史の事象を彩る」ではフードマイレージを事例とした消費者教育や，地理的要素を時系列的に見て行う歴史教育が，国際理解に繋がる可能性を示している。

続く第2節の「地球的課題と国際協力」における「1.「人口」を用いて地域を科学的に理解する」は，国勢調査統計データを利用して，数値から地域特性や課題を発見する試みであり，発表プリントの事例は授業をイメージするために有益である。「2. 地球的課題としての食料問題」では，SDGsに関係する世界的な課題を考える力を養う授業が紹介され，マインドマップや要素間の関係図で考え方を整理させる試みは興味深い。「3. 水資源から世界を考える」は，ミネラルウォーターやバーチャルウォーターなど身近なものを教材として環境問題を理解させる工夫が行われており，生徒にとって意外性のある授業だったのではないか。「4. 都心と郊外の様々な都市問題を身近な事例から考える」は，ドーナツ化や人口の都心回帰などを数値データや新旧地形図の比較から理解させる授業の紹介であり，持続可能なコミュニティについても考える機会を養うものである。「5. 民族問題を授業でどのように扱うのか」では，パレスチナ問題などを事例として民族問題を地域特有の問題ではなく，普遍化して考えることができるような取り組みとなっている。「6. 日本の領土問題を考える」では，北方領土問題に関する「日露首脳会談」の疑似討論会を生徒自身に行わせるというユニークな授業が紹介されている。「7.「貿易ゲーム」によって先進国と途上国間の格差を理解させる」では南北問題を理解させるため，アフリカを事例とした「貿易ゲーム」を行い，疑似体験として経済問題が発生する仕組みを理解させる取り組みが示されている。これらの授業は，全体像を捉え，解決策を模索することが困難な問題を実感させる大変有意義な試みと思われる。「コラム4　カルトグラム（変形地図）の世界へ」では，カルトグラム（変形地図）で国家間の関係を視覚的に理解させる工夫が述べられている。

第3章の「持続可能な地域づくりと私たち」の第1節「自然環境と防災」における「1. 世界の自然災害と防災を学ぶ」では世界の災害の歴史を概観し，地理総合における柱の一つである防災について日本と世界の繋がりを考える授業について記されている。「2. ハザードマップ・防災ゲーム（DIG・クロスロード）を活用した授業」では，DIG，ハザードマップ，クロスロードを活用し，災害時の意思決定を生徒が疑似体験する授業の実践例が示されている。「3. 生徒と災害の間に心の距離をつくらない防災教育」では，疑似GISとしてプラ板を使った地図の重ね合わせなどを行い，生徒に自然災害や防災活動を身近なものとして実感させる授業が紹介されている。

第2節の「生活圏の調査と地域の展望」における「1. 新旧地形図から学校周辺地域の変遷を探る」では，地形図の読図から生活圏の課題を発見させ，地理的な見方や考え方を養うものである。「2. 地域の歩みや現状を知り，社会的課題の解決を考える授業ESD」では，オオタカの営巣地の保全問題における環境保護団体と行政との合意形成を事例とし，地図学習と巡検を組み合わせた授業が紹介されている。「3. 東京ディズニーランドができるまでとその周辺施設のかかわりの学習地域調査」では，人気のテーマパークを事例に環境と開発との関係を考えさせる授業紹介であり，独自の穴埋め問題や年表の作成を通じて地理的要素の相互関係を時系列的に理解させようとしている点が興味深い。「4. 身近な地域を理解するための方法」は，地域調査に関する授業の実践例であり，フィールドワークを実施することで，見慣れた地

域の特性に気づかせ，地理的興味を養おうとしている。「5．学校を中心とした身近な地域の調査」では，通学ルートを利用した調査から，情報を地形図上でまとめ，教室内で仮説を検証し地域特性の把握に導く授業を紹介している。

ここまでに紹介したように，本書は新たに始まる「地理総合」の内容にこだわりながらも，そこに様々な授業の工夫を詰め込んでいる。まず，地図やGISの技術習得に重点を置いた第1章では，地理を学習するための最重要ツールである地図をわかりやすく丁寧に説明し，従来からの技術継承を図っている点が評価できる。なお，この部分は日本のe-Japan戦略から始まる「日本型IT社会」の構築や，地理空間情報活用推進基本計画における「地理空間情報の高度活用社会」の実現など現在の国家的戦略と密接に関係する部分である。そのため，情報通信技術（ICT）を避けるのではなく，「地理院地図」などウェブサイト上で閲覧できる地図などを極力活用し，これまで行えなかった魅力ある授業を行うための参考になる。

国際理解や国際協力を生徒が主体的・対話的に学べるよう意図された第2章については，地誌とは異なるため当該部分の扱いに困っている教員が，適切な授業をイメージできるような内容となっている点が評価できる。また，多くの教員が行ってみたいと感じる工夫をふんだんに盛り込んでいるのも魅力である。なお，高等学校学習指導要領によると，当該部分で学ぶのは「生活・文化」（生活および文化）ではなく「生活文化」（生活のありよう）であり，考え方によっては，これまでの高校地理よりも狭い意味で使われる可能性がある。その場合には，ここで紹介される授業のように，グローバルな内容を生徒の日常生活と結びつける工夫がいっそう重要になる。

防災やESDなど現代的なテーマや地域調査に関する第3章では，生徒が世界と日常生活圏を結びつけ，一人の市民として社会に参加するためのきっかけ作りを行おうとする工夫が評価できる。高等学校学習指導要領によると，高校教育で「持続可能な開発」を扱うのは地理の役割とされており，ここで紹介される授業はそれを担うために十分な内容である。なお，この第3章は，第1章に記されているGISや地図の技術を活かす部分である。地理院地図などのツールが日々充実しつつあり，それらを使ってさらなる授業の改良が期待できるため，読者は是非とも第1章と第3章の内容を結びつけて読み進めてほしい。

以上の様に本書は，これまでの実践の積み重ねから得られた経験を基にした，内容豊かな素晴らしい授業報告であり，また「地理総合」への魅力ある提案でもある。それぞれの内容は執筆の意図が明確でわかりやすいだけでなく，授業の風景を再現できるように配慮されている。これまで先人達が培ってきた成果を共有し，互いに有効活用することの重要性が伝わってくる書籍である。

（橋本雄一）

矢ケ﨑典隆・加賀美雅弘・牛垣雄矢編：『地誌学概論　第2版（地理学基礎シリーズ3）』朝倉書店，2020年2月刊，174p.，3,400円（税別）

本書は，朝倉書店から刊行されている「地理学基礎シリーズ」内の1冊で，2007年に刊行された初版の第2版である。初版は10刷りまでなされている。本書については，世界的に著名な地理学者で，残念ながら鬼籍に入られた偉大な地理学者，吉野正敏，竹内淳彦による書評がすでにある（前者は地理学評論81（6）（2008年），後者は経済地理学年報53（3）（2007年））。ただし，第2版ではあるものの，内容的には本書は初版から大幅な変更がなされており，若輩者が改めて本書について